

8602「やめてっ」百合江の声だった。

「やめてっ」

百合江の声だった。

「どいてろ」

「やめてっ、もう死んじゃう」

私は立っていた。腹に拳がめりこんできた。膝が落ち、そのまま倒れた。一瞬だが、意識が遠くなったようだ。気づくと、躰だけが起きあがろうとしていた。そして立った。

「まだやる気だよ、この野郎」

殺す気があるか、私は呟いた。声にはならなかったが、呟き続けた。殺すだけの肚を決めて、おまえら俺を殴っているのか。俺は立つぞ、殺されるまで立つぞ。

北方 謙三：『過去 リメンバー』

[許容訳例]

“Stop!” cried Yurie.

“Out of the way!”

“Stop, or he’ll be killed!”

I was standing. A fist sank into my stomach. My knees sagged, then directly I collapsed. I seemed to have fainted, though only for a moment. When I came to, my body struggled to rise against my will. Then I got up.

“Do you intend to kill me then?” I murmured. No voice came out, but I continued murmuring. “Are you beating me up because you’re resolved to kill me? But I’ll stay standing. I’ll stay standing till I’m killed!”

[翻訳例]

“Stop!”

The voice was Yurie’s.

“You keep out!”

“Stop! You’re killing him!”

I was on my feet. A fist buried itself in my stomach. My knees sagged, and the next moment I’d collapsed. For a brief moment I must have lost consciousness. When I came to, my body was trying to get up. Then I was on my feet.

“He still hasn’t had enough, the bastard!”

“You want to kill me?” I muttered. No voice came out, but I went on muttering to myself. “So you’re attacking me with murderous intent, eh? Well, you won’t keep me down not till you finally kill me!”

■「やめてっ」(8602)

★「やめてっ」は Stop! でいいです。Stop it! ならまだいいですが、Stop that! は駄目です。これは命令的になり、父親が子供に対して「やめなさい！」と言うような時に使うものです。

■百合江の声だった。(8602)

★「百合江の声だった」は「とても百合江の方を見る状態ではなかった。百合江の声が聞こえた」という含みがあるので The voice was Yurie's. とか It was Yurie's voice. がいいでしょう。Yurie exclaimed. でも間違いとはいえません。

■「どいてろ」(8602)

★「どいてろ」は「どいていろ」ということ。「じゃましないでそこにいろ」という意味の (You) keep out of the way. とか「そこにじっとしていろ」という意味の You stay out of this. などが使えます。Step aside! は「どいてください」という感じでやわらかすぎます。(You) keep out of this [it]! も間違いではありませんが、「どいてろ」というより「口を挟むな」という感じが強くなります。

■「やめてっ、もう死んじゃう」(8602)

★「もう死んじゃう」は You're killing him. とか You'll kill him. です。この二つは一見違うようですが内容的には同じことになります。

■私は立っていた。(8602)

★「私は立っていた」は I was standing. でも間違いではありませんが、I was standing. は「私は坐っていなかった」(I was not sitting down.) の意味にしかありません。表現が弱い感じがです。ここは「私はまだ倒れないで、しっかり立っていた」ということでしょうから、I was on my feet. くらいがいいと思います。これは、たとえば、Although they were hitting me hard, I was still on my feet. のように使います。

■腹に拳がめりこんできた。(8602)

★「腹に拳がめりこんできた」は、もうすでになぐられているのですから「また一つ腹に拳がめりこんできた」という感じです。その感じを出すには a fist... で「めりこんできた」の感じを出すとするれば A fist came thudding into my stomach. としたいところです。thud というのは、何か柔らかいものにぶつかる、という意味合いの言葉です。あるいは A fist buried itself in [sank into] my stomach. です。stomach の代わりに belly も使えなくはありませんが、あまりに直接的で、普通は避ける傾向にあります。なお、A fist sank in my stomach. にすると、厳密には「fist がすでにお腹の中にあって、その中で sink した」という意味になるので不適切です。

■膝が落ち、そのまま倒れた。(8602)

★「膝が落ち・・・」は「(がくんと)膝が落ち・・・」ということですから英語では my knee sagged という表現を使います。sag というのは「何かぴんと張っていたものが急に緩む・折れる・たわむ」という意味です。たとえば、sagging cheeks [belly] (年をとってたるんだ頬 [腹]) のような使い方もあります。なお、I fell on my knees. は「膝をついた」という意

味で、ここの場面では合いません。

●「落ちそのまま」

「落ちそのまま」は「落ち [て] (そして) そのまま」とほぼ同じですから then で十分ですが、「それから」と考えるなら and the next moment; and the next thing I knew などを使ってもいいでしょう。

★「倒れた」の「倒れる」には fall (down) (転倒する) tumble (転がる) collapse (崩れ落ちる) などありますが、ここでは collapse がパンチが効いて一番いいです。

■一瞬だが、意識が遠くなったようだ。(8602)

★「一瞬だが」は「一瞬(の間)」と考えて For just a moment; For a brief moment など。Only for a moment も使えます。

★「意識が遠くなったようだ」は、次の「気づくと・・・」と重ねて考えると、「意識が遠くなったにちがいない、というのは、気がつくとき・・・していたから」となるので、英語では、こういう時には I must have fainted [lost consciousness] とします。なお、I seemed to have been fainted…は「(あとになってみると)どうも気が遠くなったのではないかと思った」という意味ですから駄目です。

■気づくと、体だけが起きあがろうとしていた。(8602)

★「気づくと」ですが、come to oneself (意識を取り戻す・正気に返る) という成句もありますが、「気づくと」は myself を付けないで When I came to とするのが自然です。

★「(気づくと,) 体だけが起きあがろうとしていた」は「気がついてみると、体が起きあがろうと努力していた」です。いかにもハードボイルド的な表現で、自分の体の動きを客観的に眺めているのです。したがって、my body was trying to get up とすれば「無意識の内に(心とは離れたところで)身体は・・・しようとしていた」という感じになります。他に my body was struggling to rise でもいいでしょう。なお、ここは行動を客観的に[ハードボイルド的に]表現するので、自己体験的な I found myself…という表現は好ましくありません。

■そして立った。(8602)

★「そして立った」は「そして(次の瞬間には)立っていた」と考えて Then I was on my feet. が最もいいでしょう。Then I got up でも間違いとは言えません。

■「まだやる気だよ、この野郎」(8602)

★「まだやる気だよ」は he still hasn't had enough でしょう。これはよく使われる表現で he still wants to be hit more, …と同じ内容になります。ほかに he's still trying to fight でも意味は通じます。

★「この野郎」は the bastard でしょう。The swine は不適切です。これは軽蔑的な言い方で、相手が何か道徳的によくないことをしたとか、軽蔑すべき手口で犯罪を犯した、というような場合に使います。

■殺す気があるか、私は呟いた。(8602)

★「殺す気があるか」は「そうか[なるほど], 殺したいのか」とか「そうか[なるほど]」と
考えて You want to [are going to] kill me?とします。

★「私は呟いた」の「呟く」は次の「声にはならなかった」と考え合わせると、口の中だけ、口唇だけ動いて「呟く」ということです。したがって、I muttered です。mutter というのは、人が何かやっているのを見て、これでいいのかな、おかしいんじゃないか、と何か帝王する気持ちとか反感がある場合によく使う言葉です。I murmured はやわらかすぎるし、音がしたり声を出したりするのですから、次の「声にはならなかった」とつながりません。なお、I said to myself.でもいいでしょう。

■声にはならなかったが、呟き続けた。(8602)

★「声にはならなかった」は No voice came out.ぐらい。

★「呟き続けた」は「声にはならなかった」があるので「自分に（呟き続けた）」を加えたいです。したがって、I went on muttering to myself とします。went on の代わりに continued も使えます。なお、go on の代わりに kept on を使うと何かプラスアルファ、たとえば、He keeps (on) asking me the same question. / He keeps interrupting my work.のように、現代の会話では「しょっちゅう・・・で困っている」というようなニュアンスをもつ場合が多いと思います。

■殺すだけの肚を決めて、おまえら俺を殴っているのか。(8602)

★「殺すだけの肚を決めて、おまえら俺を殴っているのか」は、文字通り訳すと Are you beating me up [attacking me] because you're fully resolved to kill me?ですが、これは申し分ない英語ですがあまりにもきちんとしていて冷静過ぎて、このシチュエーションにはそぐわないと思います。「殺す意志・決意をもって俺を殴りつづけているのか」と解して So you're attacking me [beating me up] with murderous intent?ぐらいです。この with murderous intent は法律用語としても使う決まった表現で「殺意をもって」ということになります。

■俺は立つぞ、殺されるまで立つぞ。(8602)

◆I'll do something と I'm doing something

「俺は立つぞ」は、すでに立っているのですから、「俺は立っているぞ」と解するか、続く「殺されるまで立つぞ」と合わせて「俺を倒せはしないぞ、俺を殺すまで」という風に解するかどちらかでしょう。前者なら I'm determined to...の意味の will を使って I'll stay standing.という表現でいいと思うのですが、もっといい表現は I am staying standing です。この I am doing something というのは「・・・ということになっている」つまり、「自分の意志とも関係なく・・・ことになっている」という感じで、たとえば、I'm not leaving this room until you confess.のように使います。分析してみると、普通なら客観的な事実にしかならない表現をわざと使うことによって自分の決心とか意志の強さを表すことになって I will...(I determined to...)よりも主観性を組み込むことができるのです。後者の「俺を倒せはしないぞ、(俺を殺すまで)」の場合は Well, you won't keep me down.ぐらいです。

★「殺されるまで立つぞ」は I'll stand up again and again till I'm killed.でも意味は通じます

が、弱くてハードボイルドにならないので、上の Well, you won't keep me down につづけて not till you finally kill me とするのがいいでしょう。

●卑俗な話語表現に関して

ここで使われるような話語表現は、アメリカなら E・S・ガードナーのペリー・メイスンものの推理小説、オーストラリアならカーター・ブラウンの探偵小説などを読むと出てきます。特にガードナーの作品は、ほとんどが口述筆記されたものなのでリズムカルです。私は若い頃、これらの推理小説の他に、ハイブローの英語を学ぶために BBC が出していた The listener を、ローブローの英語を学ぶために Tit-Bits という大衆週刊誌を取り寄せて読んでいました。後者の大衆誌は、旧版の『スタンダード和英辞典』（竹原常太編著）でよく引用出典になっていたからです。